夜の妖精の小さな旅

水沢　流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜の妖精の小さな旅

【Ｎコード】
Ｎ１４３９Ｙ

【作者名】
水沢　流

【あらすじ】
「大きくない、力だってない。でも大丈夫、私には……」

小さな勇気と好奇心で、困難に立ち向かう妖精のおはなしです。

人物紹介に、ちょっとしたネタがあります♪

◇0　登場人物&内容紹介

＞i34270―2323＜

［作者より］

子供への読み聞かせ（寝物語）として書き始めたもの。

剣も魔法も使えない妖精が、ちょっとの勇気と、アイディアで困難を切り抜けて行く冒険ファンタジーです。

小学生ぐらいからを対象に、親子で読めるものをめざして――

スローペースですが、のんびりお読みいただければありがたいです♪

――――――――――――――――

「よるの国はやさしくて、
うるさい音はなにもなくて。
ここが楽園だと言う人もいるけれど、
それだけじゃ、きっと足りなかった」

行頭の一文字だけ読みすすめてみて下さい♪

――――――――――――――――

・登場人物紹介

［ニッケ］

夜の妖精の子。

銀月色の髪と、アメジスト（紫水晶）色の目を持つ。

［ジオ］
夜の国にいる「小さいもの」。
ペリドット（緑）色のひとみに黒い体。
鳥になったり猫になったり魚になったりできる。
ほんのり光るしっぽの先は、気分によって色が変わる。

◇1－1　旅立ち

そこは、まっくらな国でした。

やさしいやみに包まれた、しずかなしずかな夜の国。

夜の妖精ニッケの物語は、この、夜の国から始まります……。

ニッケの髪は、銀月色をしています。
目は、すきとおるようなムラサキ色。

でも、ニッケはものを見たことがありません。
もちろん、ニッケだけではありません。
夜の妖精たちはみいんな、世界が見えていないのです。

パパもママも、王さまも女王さまも。

でも大丈夫。

夜の妖精は耳がとっても良いですし、お守りのおかげで危険を知る事ができるのですから。

「ニッケ、いる？」

「いるわ、ママ」

「ちょっと来て。ジウムおじさんに届けてほしいものがあるの」

「はあい」

ニッケは立ち上がって、ママの声のする方に向かいました。

家のカベにはたくさんの文字が彫られていて、それにさわりながら行けば台所につきます。

夜の妖精の国の壁は、どこもかしこも文字だらけ。

みんなが、それを目印にして移動するためです。

「来たわ、ママ」

「はい、これ」

甘いにおいがするバスケットを、ママがニッケに手わたしました。

「なあに、これ？」

「あら、わかっているんでしょう？」

「ふふ、根っ子の実のジャムね。そうでしょう？」

「そうよ、おじさんに届けてちょうだい。いっしょに入れたアメは食べていいから」

「やった！」

ニッケはよろこびました。

なにしろ、根っ子の実のアメはうっとりするほど甘い、とてもおいしいアメなのですから。

とろんと舌の上で溶けて、すうっと水のような後味を残す。夜の妖精の子どもならば、誰もが大好きなアメなのです。

「ジウムおじさん、よろこびそう」

「もちろんよ、ママが作ったんだから。おねがいね、ニッケ」

「はあい」

ニッケがそう言うと、ピョコンと棚からジオが顔を出しました。

ジオは、夜の国にいる「小さいもの」。

まっくろな体と緑のカンラン石色の目をもっていて、しっぽの先にともる白い光の色を、気分によってくるくる変えるのです。

猫や鳥、魚などいろんな姿になれるジオですが、今日は猫の姿になっているようでした。

「みゃっ」

「ジオも行きたいの？」

「みっ」

「いいわ。いっしょに行きましょ？」

そう言ってニッケがうでをのばすと、ピョンとジオがとびのってきました。

その頭をちょっとだけなでて、門の方へと歩いて行きます。

そして家から出る扉を開けて、ニッケは後ろをふり返りました。

「行ってきます、ママ」

ニッケが手をふります。

「みゃーお」

ジオも光るしっぽをふります。

ママはその空気のゆれを感じて、「行ってらっしゃい」と明るい声で送り出してくれました。

◇1－1　旅立ち（後書き）

まだ機能に慣れずに戸惑っております。
アドバイスなど御座いましたら、よろしくお願いいたします。

◇1―2　根っこの畑

家を出て少し歩くと、ふんわり、甘い風が流れてきました。

「みゃんっ」

ジオが、ぴんと耳を立てます。
それまでカベに手をつきながら歩いていたニッケは、立ち止まってバスケットに手を入れました。

ママからもらったアメを出して、ぱくりと一つ口に入れます。
それから、もう一つアメを取り出しました。

「はい、これジオの分ね」

「みゃうっ」

ニッケにさし出されたアメに、ジオが元気よくこたえます。
そして、もそもそと黒いからだを動かして、小さなリスの姿になりました。

もらったアメを、カリカリとかじるジオ。
その音を聞きながら歩いて行くと、やがて、甘い風のもとにたどり着きました。

……根っ子の実の畑です。

地面の下にある夜の国では、どこも岩の天井から根っ子が下がっていて、そこに時々、ぷっくりと金色のみつが入った実ができるので

す。

これをにつめてジャムやアメにしたり、じっくりと寝かせてお酒にするのですが、良く実が取れるここは、畑として大事にされていました。

「ジオ、落ちないでね」

肩に乗ったジオに声をかけて、いつもどおりの道を歩いて行きます。そのまわりではビーズのような実に光が当たって、キラキラ、宝石のレースのようにかがやいていました。

そこを、数分歩いたころでしょうか。

「やだ、道が変わっているわ！」

ニッケは叫びました。

「アブナ石が鳴いているもの。前はまっすぐ行けたのに」

胸に下げた白い石がリンリンと鳴っています。

アブナ石。

夜の妖精達にだけ、危険を教えてくれるふしぎな石です。夜の妖精がうまれると、必ずこれをわたすのが夜の国の決まりなのです。

「ねえ、ジオ」

「みゃっ？」

いつの間にか猫の姿に戻っていたジオが、ぴこんと耳を立てました。

「ジオ、あのね。とっても遠回りになってしまいそうなの」

「みゃ……」

畑を抜けてまっすぐ行けば、おじさんの家はもうすぐそこなのに。
それに、ニッケはここ以外の道を知りません。

他の道に行ったら、どんな遠回りになることか！

でも、石が危険を教えてくれているのを無視するわけにはいきません。
ニッケはなやんでなやんで、けっきょく、根っ子の畑から横道に出ました。

リンリンと言う音が止まります。

「やっぱり、こっちでいいみたい。行きましょう、ジオ」

「みー」

ジオはちょっぴり不満そうです。
きっと、早くジウムおじさんの家につきたかったのでしょう。

◇1―3　アカリタケ

さらに歩くと、やがて空気がしめってきました。

ぬれるのが嫌いなジオはそれが気に入らないようで、しっぽの先の光を青にしてだんらり下に垂らしています。

いい気分がしないのはニッケも同じでした。

なんだか、アメがしめってしまいそうな気がしたからです。

「こっちね」

壁の文字を指で調べながら、おじさんの家に向かいます。

そのとたん、何かがふわっとニッケの前でひかりました。

「ジオ？」

「みゃ！」

ジオが立ち上がります。

その声で何かがあるときづいて、そっとニッケは指を伸ばしてみました。

「花……？」

やわらかな何かが、ニッケの手にふれています。

ちょんちょんと押すとその通りにゆれるそれは、大きなかさと細い茎を持っているようでした。

大人妖精のように風のうごきだけで形を読めないニッケは、そっと

顔をちかづけてみます。
すると、若い木のうらがわのようなにおいがしました。

「アカリタケね！」

ニッケが答えを言います。

「みゃおっ！」

ジオがうれしそうに鳴きました。

このアカリタケはみんなのごちそうなのです。
これのスープはジオも大好き。
じんわりと体の芯からあたたまるアカリタケのスープは、暗い中でもほんのり輝き、夕日を溶かしたような光をはなち続けるのです。

「おじさんのお土産にするわ」

ニッケがアカリタケをつんで、バスケットに入れます。

それを見たジオが、しっぽの先でちょんちょんとニッケをつつきました。

「なに？」

「みゃ」

あっちあっちとしっぽでジオがニッケに教えます。
その案内の通りに歩いて行くと、ぱあっと一気にあたりが明るくな

りました。
まるで洞窟に夕日が落ちてきたよう。
なんとそこには、たくさんのアカリタケが生えていたのです。
「すごい！」
こんな場所をニッケは知りません。
きっと、パパもママも知らないのでしょう。
誰もまだ見つけたことのない、秘密の場所にちがいありません。
「ふふ、ジオ。すごいお土産ができちゃったね」
「みゃーん」
クルルとのどを鳴らしてジオがしっぽを振ります。
オイラが見つけたんだい、と言いたそうな感じでした。
＊＊＊
アカリタケの道を抜けると、ひんやりと空気がひえてきました。
水の音がします。
「湖ね」
「みゃ」
すうっと冷えた水がたっぷり満ちた湖。
奥の方でちらちらとゆれる炎は、軽い空気と、燃える空気を混ぜて

水を作るウォタンたちが住む、水の宮殿の水晶塔のようでした。
そのしょうこに、壁にはこんな事が彫ってあります。
「このさき火気厳禁、スイソとサンソあり」
許可証を持っていないニッケは水の宮殿には入れませんが、いつか、行ってみたいと思いました。
「ジオ、アカリタケをぬらして行きましょう？」
「みゃっ」
せっかくのアカリタケです。かわかしてしまうわけには行きません。壁に手をつきながら湖の方にニッケが近づいて行くと、ふいに、しわがれた声がしました。
「おや、おや。夜の妖精の子かい？こんばんわ」
「こんばんわ。あなたはだあれ？」
「地の妖精だよ。スキトオッタラを釣っていたんだ。そろそろ夕飯にしようと思っていたところでね。あんたは？」
「えっ？」
もう、そんな時間なのでしょうか。
そう思ったとたん、ニッケは何にも食べていない事を思い出しました。

急におなかがすいて来ます。

「あの」

「何だい？」

「晩ごはん、いっしょに食べてもいいですか」

「もちろんさ。よーし決まりだな、行こう」

地の妖精が立ち上がりました。

◇1－4　スキトオッタラ

地の妖精の肌は、ごつごつした岩のようでした。
それでも怖いと思わなかったのは、その声がやさしかったからなのでしょう。

ニッケの手を引いてくれる地の妖精が歩くたびに、ばしゃばしゃとバケツの中でスキトオッタラが跳ねる音がします。

スキトオッタラは透明な魚。
光の少ない夜の国らしく、骨が見えるぐらい透明なのです。

パパが昔、こう言っていました。

「地上の魚は、水面のきらめきのフリをするためにウロコに金属の色をつけるけど、夜の国ではそれが必要ないから透明なんだよ」

地上では昼になると、水面がキラキラしていると言うのです。
だから金属の色をしていると、そのキラキラと区別がつかなくなって、敵に狙われにくいのだとパパは教えてくれました。

もちろん、夜の妖精たちはみんな目が見えません。
それでも、他の妖精からいろいろな事を聞いて、色や、光について覚えて行くのです。

「夜の妖精、こっちだよ」

地の妖精の声がします。
だんだんと、空気があたたかくなってきました。

「ここは？」

「ワシの家さ。アツ岩がたくさんあるからね、あたたかいだろう」

「ええ、とっても」

アカリタケの道からずっと寒い場所をとおってきたニッケには、とてもうれしいあたたかさでした。

「おや、アカリタケを持っているんだね」

「はい」

「焼いてあげようか？その方が長持ちする」

「いいんですか？おねがいします」

ニッケがアカリタケをわたします。

地の妖精が、それを真っ赤に燃えるアツ岩に乗せました。

「いいにおい」

じゅうっと焼ける音がします。

やがて、アカリタケとスキトオッタラの香ばしいにおいがただよいはじめました。

透明なスキトオッタラは、焼くとおいしそうな白い色に変わります。

それが待ちきれないのか、ジオがそわそわと肩の上でアツ岩を見ていました。

「焼けたよ」

地の妖精が、こんがりと焼けたスキトオッタラをお皿に乗せてくれます。

それを見下ろすジオが、ゆらゆらとしっぽをゆらし始めました。

「みゃー」

「ジオ、まだ熱いわよ」

今にもスキトオッタラに飛びつきそうなジオを、ニッケが手で押さえます。

すると、地の妖精が焼きたてのアカリタケを布に包んでくれました。

スッキリとしたにおいが布からただよってきます。

ニッケはうれしくなりました。

「カオリ草ね」

「そうだよ。最近摘んだばかりなんだ」

カオリ草には色々な種類があって、ものを腐りにくくしたり、魚に風味をつけたりできるのです。

それはマホウではなく草の持つ力だと、地の妖精が教えてくれました。

「草が虫や病気から自分を守ろうとする力を、ワシらが使わせてもらっているだけさ」

そう言いながら差し出された布包みを、ニッケが両手で受け取ります。

それからバスケットにそれを入れ、ニッケはお皿に手を伸ばしました。

「いただきます」

「どうぞ。たっぷり食べておくれ」

ジオの分のスキトオッタラを地面に置きながら、地の妖精がほほえみます。

そして、晩ごはんが始まりました。

◇2―1　知らない世界

どしいん！

地面がゆれたのはとつぜんでした。

ずしいん！とまた地面がゆれます。

「きゃっ、なに、なに！？」

ニッケは飛び起きました。

地の妖精が何かしたのでしょうか？

ジオがニッケにかくれてブルブルふるえています。

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ。ジオ」

ぎゅっとジオを抱いて、ニッケはすわり込みました。

ずしーん、どしーん！

音がどんどん近づいて来ます。そのたびに地面がゆれます。

どんどん、どんどん音がニッケに迫ってきます――

すぐ、近くに！

「ふまれるっ！」

ニッケがそう思ったとたん、どしーん！と言う音がニッケを通りす

ぎました。

そして、

ずしーん。

どしーん…。

…ずしーん。

音は遠くの方に行ってしまいました。

「びっくりした……」

どきどきする胸を押さえて、そっと息をはきます。

いったい何がどうなっているのでしょう。

ニッケは首をかしげました。

「ここ……どこ？」

ニッケの目には何も見えませんでしたが、なんだか、空気がちがうのです。

そのとたん、けたたましい声が上から聞こえました。

「見ろよ兄さん、夜の妖精が地上にいるぜ！」

「見ているよ弟、夜の妖精のくせに昼にいやがる！」

ぎゃあぎゃあと騒いでいるのはワタリガラス。

とうめいなガラスの体を持つ、おしゃべりがだいすきな鳥です。

「はっはあ！これはみんなに知らせないとなあ、兄さん！」

ひゅうん！と風を切る音を立てて一羽がつばさをひろげます。

「もちろんさ、行くぞ、弟！」

二羽目もつばさを広げ、どこかに飛び去っていきました。

ニッケはおどろきました。

「地上……ですって？」

いったい、どうして。

地の妖精のしわざでしょうか。

でも、そんな悪い妖精には見えませんでした。

「とにかく、隠れなきゃ」

ワタリガラスには、いじわるなものもいると聞いた事があります。

ニッケはいそいで、隠れられそうな場所をさがしはじめました。

◇2－2　ぶるぶる石

次に目がさめても、やっぱり夜の国ではありませんでした。
かわいた土のにおいが、地上である事をニッケにおしえています。

「帰らなきゃ」

ニッケは地面をぺたぺたとさわりはじめました。
夜の国と違ってさらっとした地面です。

「あら？」

何かが指にふれました。

「何かしら」

それは、小さな玉でした。

ニッケのおやゆびほどしかない小さな玉。
そこに彫ってある文字は、なんと、ニッケの知っている夜の国のものだったのです。

「ぶるぶる石だわ！」

ニッケはおどろきました。

「ここにも、ああ、ここにも。すごい、全部そろってる！」

全部で十個。

おばあさんに聞いた事があるぶるぶる石。
それは、行きたい場所を言うと、そこに案内してくれる石なのです。

おばあさんの声が思い出されます。

「大人妖精がな、風を読めるようになる前の話じゃ。
ぶるぶる石と言うものが、ここにはたくさんあったのじゃよ。
並べて体に巻くとな、目的の方向の石がぶるぶるふるえて行くべき方を教えてくれる。
音がしないから、おそろしい怪物に気づかれる事も少ないんじゃ」

「その石はどうなったの？」

「さあねえ、いつの間にかとれなくなってしもうた。
代わりにアブナ石が採れるようになった。
もう役目が終わったと思って、ひっそりと眠ってしまったのかも知れんねえ」

夜草の糸をつむぎながら、おばあさんはそう言っていました。

カラカラ、カラカラ。
おばあさんの回す糸車の音が、なつかしく思い出されます。

あたたかい石の家で、やさしく話しかけてくれるおばあさんの顔が思いうかびます。

「……っ」

ニッケは泣きそうになりました。
夜の国にはパパもママも、おじいさんもおばあさんもいるのです。

「…だめ、泣いてはだめ」

ぐいっと涙をふいて、ぶるぶる石をにぎりしめます。
そして、ニッケはその場に座りこみました。

「えっと……」

文字を確かめながら、地面にぶるぶる石を並べます。
それが一列に並んだとたん、ふわっと風が吹いて、ぶるぶる石のベルトができあがりました。
おそるおそる腰に巻くと、ピッタリとニッケに合います。

ニッケは言いました。

「夜の国に帰りたいの。案内して、ぶるぶる石」

すぐに一つの石がぶるぶるとふるえました。

「やだ、くすぐったい」

ニッケが笑うと、ぴたっと石がうごかなくなります。
それをなでて、にっこりとニッケはほほえみました。

「ありがとう、ぶるぶる石。迷ったら聞くからお願いね」

ニッケがそう言うと、全部の石がぶるぶると答えました。
ニッケは笑い転げてしまいました。

◇2―3　白と黒

「地上って……暑いのね」

ふらふらと岩のかげを歩きながらニッケは言いました。
何だか暑さでぼうっとして来た気がします。

「マッシロゴケの布が欲しいわ」

夜の国のマッシロゴケは、その名前の通りまっしろなコケ。
これで作った布は、アツ岩の近くを通る時に熱を少し防いでくれるのです。

「ジオ、どこかに水はないかしら？」

そう聞いた時でした。

ずしーん！と大きな音がして、地面がぐらりとゆれました。

「きゃっ！」

ニッケが座り込みます。
その頭の上に、ぬうっと大きな顔があらわれました。

「何だあ、夜の妖精がある。あんまりぢいせえもんだから、踏みつぶしちまうどこだったよお！がはは！」

ひどいしゃがれ声です。
ニッケは怖さでくらくらしました。

でも、ここで負けるわけにはいきません。
ニッケはキッと声の方をにらみました。
「わ…わたしは夜の妖精ニッケよ。今、水を探しているの。あなたは誰？」
「おでかあ？おでは巨人のデオだ」
しゃがれごえが答えます。
声の元、緑のけむくじゃらの巨人が、いかついあごをなでてニッケを見下ろしていました。
巨人がにんまりと笑います。
「がはは、勇気のある妖精だな。ようし、おでの質問に答えられたら水をやるよ」
「いいわ、何？」
「あっぢに黒い石と白い石がある。そこから黒い石を持っで来い！がはは！」
巨人は得意そうです。
何と言ういじわるでしょう！
夜の妖精の子が見えない事を知っていて、そう言っているのです。
けれど、ニッケは胸をはりました。
「行って来るわ、約束守ってよね！」

「……え？」

ぽかーんとしている巨人を残して、ニッケは石の場所に向かいました。

◇◆◇◆◇◆

「こっち…じゃないわ、こっちね」

石を一つ一つさわりながら、ニッケが黒い石をえらんで行きます。
もちろん、色なんて見えていません。
でも、マッシロゴケは白いからアツ岩の熱をふせいでくれると教わっています。
だから石だって、白い方が冷たいに決まっているのです。
黒はあたたまりやすくて、白はあたたまりにくい。
ニッケはそれを、おぼえていました。

「うん、やっぱりこっちだわ」

黒い石をにぎりしめてニッケが息を吸います。
そして、おもいっきり上に向かって叫びました。

「デオ！」

「ああん？」

ぬっとデオが顔を出します。

「ほら、これでしょう？」

ニッケが石をかかげます。
それを見て、デオが目を丸くしました。

「……合ってる」

「約束守ってくれるわよね？」

「ああ、おっだまげだな。見えねっでうわさはウソか？」

デオがニッケをつまみ上げます。

「うそじゃないわ」

ニッケが答えました。
あまりの高さに、ぽとっと落とされたら死んでしまうんじゃないかと怖くなりましたが、ここで弱い所を見せてはなりません。

「夜の妖精のヒミツよ。泉にまで運んでくれたら教えてあげる」

「ぶふ、がはは！　おめ、ぎにいっだよ」

巨人がニッケを手の上に乗せます。
小さな夜の妖精の勇気が、何だか面白かったのです。

「づがまっでろ」

巨人が歩き出します。
そして泉に運ばれたニッケは、たっぷりと水を飲む事ができました。

◇◆◇◆◇◆

デオのそばでひとねむりして、ニッケは出発する事にしました。
だけど、それをデオに言うと、デオはとても悲しみました。

「いっぢまうのか……」

デオは残念そうです。

「いっしょに行かない？」

ニッケがそう聞くと、デオはうなだれました。

「おで、おおぎすぎるからよ。外に行っだら誰かふんじまうだよ。
おめだっで、おいはらう気だったんだよ」

「デオ……」

ニッケはハッとしました。
デオは最初から、ニッケをふむ気なんてなかったのです。
おどろかして外に追いやってしまえば、つぶさずに済むと思っていたのです。

そのしょうこに、デオの目は真っ赤でした。
ニッケが寝ている間にふんでしまわないよう、ずーっと起きていたのです。

「さ、さびじくなんがねえぞ。おめえみでえな小さいの、どっか行っじまえばいいんだ！」

「デオ……」

「おでと話した変な妖精の事なんで、わずれで、やるっ……」

ぼろぼろとデオが泣いています。
見えなくても、音でニッケはわかるのです。
ニッケは悲しくなりました。

「ねえ、デオ」

デオの方を向いてニッケが言います。

「わたしが夜の国にかえったら、地の妖精さんにお願いしてあげるわ。あなたを小さくしてくれますようにって」

「ほんどが！？」

デオが泣き止みました。
ニッケがうなずきます。

「ええ、本当よ。わたしをふまないでくれたお礼。約束するわ」

「おめ、おめえ、いいやづだな。デオ、ここで待ってる。ニッケ、無事に夜の国に着けるよう祈ってる」

デオがまた涙ぐみます。
ニッケも胸がじーんとしました。

「ありがとう、デオ」

大きなデオの手に、ぎゅっとだきついてニッケがお礼を言います。

デオとお別れするのは、ニッケもさびしかったのです。

デオは別れぎわに大きな葉っぱを一枚くれました。
夜の妖精のニッケが、太陽の暑さに負けてしまわないためです。
それをかさにして、ニッケはぶるぶる石の案内する通り、旅を続ける事にしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1439y/

夜の妖精の小さな旅

2011年11月23日18時47分発行